

一九九七年度文明学会シンポジウムについて

杉山 文彦

今回の文明学会シンポジウムは、「文明論としてのユートピア」と題して行われた。また今回初めての試みとして、学生グループをパネリストの一角に加えて発表をしてもらった。これは今年の学会幹事である私が、会議の席で思い付きを言ったのが発端で始まったことで、そのため私が杉山ゼミの学生諸君には御苦労をかけることになったが、彼らはなかなかよくやってくれたと思う。できれば今後毎年、学生グループの参加があれば良いと思う。

ユートピアといっても今ではあまり話題にならない。かつて、一九六〇年代末、世界中の若者たちがユートピアの夢を追って熱く燃えた一時期があった。それからほぼ三〇年、気がついてみたら、我々の周囲からユートピアに関わるような話題は、ほとんど消え失せていた。果たしてこれでよいのもであらうか、これが今回のシンポジウムのテーマにユートピアを採りあげた理由である。ユートピアに関わる話題が消え失せたのには、無理からぬ理由がある。六〇年代

末の学生運動は現実の壁を前にして、分裂と内ゲバの中で解体し跡には空しさが残った。また、ある意味では二〇世紀最大のユートピア運動であったといえる社会主義運動も、東側陣営諸国の内実が明らかになるにつれ魅力を失い、ソ連・東欧諸国の体制崩壊によって、すっかり色褪せたものとなった。その様な時代の流れの中で、いつの頃からか社会の理想や人の善意・良心について語ることが、なにか青臭いことダサイことになってしまった。それに代わって「人間なんて、どうせ自己中心的なものさ」といった薄っぺらな人間理解が横行し、緊張感の欠けた現実主義の中で我々は日々暮らしている。確かにかつての運動は、あまりにも安易にユートピアを語りすぎ、そのためにおおくの人々を苦しめることになった。しかし、理想と人間の緊張関係を欠いた現実主義は、単なるわがままにすぎず、現実主義としても機能しないであらう。

地球温暖化問題に見られるように人類は今、自らの文明活動全体を

再検討しなければならぬ所まで来ている。二二世紀の人類は、この危機を乗り切るため新たなユートピア像を掲げねばなるまい。理想との緊張を欠いた現実主義は、個々人の欲望を肥大させるばかりで、文明の危機を乗り切るための活動へと人々を説得する力とはなり得ない。来たるべき明日の世界を描く努力が為されねばならない。しかし、ユートピアを語ることには危険も伴う。かつて、スターリンも毛沢東も、さらにはヒットラーもユートピアを掲げて夥しい人々を悲劇の中へ投げ込んだ。また近いところではオウム真理教もユートピアを語った。ユートピアを目指して集団自殺した集団もある。深まりゆく未来への不安の中でこれからも様々なユートピアまがいの社会現象が出てくることであろう。そうであればこそ、ユートピアとはいかなるものかについて理解を深めておくことが、今急がれることなのではあるまいか。このシンポジウムはそのためのささやかな一歩でありたいとして計画されたものであった。